



河内恵子・松田隆美編著
『ロンドン物語—メトロポリスを巡る
イギリス文学の700年』

Keiko KAWACHI and Takami MATSUDA eds.,
*Tales of London: 700 years of British Literature
around the Metropolis*

(236 頁, 慶応義塾大学出版会, 2011年10月15日,
本体価格 2,800 円)

ISBN: 9784766418934

(評) 畑田美緒
Mio HATADA

7名の執筆者の手になる本書は、ロンドンを軸にしてイギリス文学を時代の流れに沿って論じたものである。執筆者のうちの4名によって2011年7月に同じく慶応義塾大学出版会から出版された『イギリス文学と旅のナラティヴ—「マンデヴィルの旅」から「ドラキュラ」まで』が、中世から19世紀末までに焦点を当てて文学と「旅」を論じたものであったのに対し、今回は扱う対象とする時代を中世からモダニズムおよび第2次大戦以降にまで拡大し、より新しい時代に対する視点を強化したものとなっている。以下では、「ロンドンという空間の歴史とイギリス文学の歴史の交点を記述することが執筆目的である」という本書の各章を概観し、その上で、個々の章の総体としての一冊という観点から全体像を俯瞰してみたい。

第1章「中世—チョーサーの時代」では、まずロンドンの理念的な表象が見られる中世のテキストのいくつかに言及した後、ロンドンの日常生活の実態を表現した中世後期のテキストが、統合された一つの共同体としてのロンドンと同時に、多様性と対立を抱えた「新たなるトロイア」としてのロンドンの姿をも浮かび上がらせていることに注目している。それから、チョーサーに的を絞る、彼の作品にはロンドンの具体的な描写が少ないことから、彼がロンドンを描くのに消極的であった、という従来の説を肯定しながらも、『カンタベリー物語』で唯一ロンドンを描く「料理人の話」の中に、14~15世紀のロンドンに固有のテーマを見いだして論じている。まず、いささか問題のある人物として提示される料理人と

ロンドンの裏社会が関連を持つ可能性を示唆した上で、それでも、裏社会の話を物語る本人は決してアウトサイダーではなく、ギルドに所属して店を持つ普通の市民であるという矛盾に目を向け、この事実がロンドンという都市の持つ矛盾と混乱の表象であることを述べる。そして、未完であるにも拘らずこの物語を省略している写本が少ないことから、「料理人の話」の重要性を看取り、そこに登場する不真面目な徒弟が、同時代のロンドンの内包する問題を前景化していることを指摘している。最終的には、複数の写本が存在し、かつ、著述家自身が絶対的権威を持つという概念を欠いていた時代において、さまざまなヴァージョンの総体としての『カンタベリー物語』は、多層的なロンドンの実態を顕在化させているものである、と結論づけている。

これに続く「ルネサンス—シェークスピアの時代」の章では、まず、演劇の都ロンドンでは、大衆演劇および劇場が何かにつけて当局や清教徒から敵視されていた一方で、観客が騎士道的英雄をテーマとする演劇に夢になっていたことが知識人たちの批判的な論評から読み取れることを指摘している。それから、戦意高揚と緊密に結びつく、当時人気のテーマであった騎士道精神の高揚が、英西戦争の時代の好戦的外交政策によって利用されていた実態を明らかにする。作家が過去から呼び起こす騎士道的英雄が、国のために戦う市民的英雄を作り出し、ロンドン市民の共同体意識を創出する手助けをしていたという現象を、主として『タンバレイン大王』の上演を例に挙げて述べることで、上述のことが成し遂げられている。また、シェークスピアの『ヘンリー5世』が、市民的英雄を祭り上げるロンドンの熱狂に対する作者の懸念を示しているのに対し、トマス・デカーの『靴屋の祭日』は、ロンドン部隊で勇敢に戦う職人を描くことで、市民階級の権力増大と上昇志向を肯定していることにも注目している。その上で、シェークスピアと同様の懸念を示す市民風刺の喜劇が数多く上演されていたことは、市民階級の台頭が脅威を感じさせるほど強力であったことを暗示していると主張する。そして、1580年代から約30年間、時代の変化に伴って市民の役割や都市の構造も変容してゆき、それが文学の形をも大きく変貌させた、と締めくくっている。

次の「18世紀—サミュエル・ジョンソンの時代」は、17世紀後半から18世紀のロンドンが持つエネルギーを、文豪ジョンソンと文学界との相互的影響との関連において分析している。まずは、名誉革命と王政復古、ベスト大流行とロンドン大火という混沌と激動の時代に、ロンドンで活躍したジョン・ミルトンとジョン・ドライデンに目を向ける。クロムウェルを支持したゆえに革命政府の瓦解後は不遇であったミルトンの生き方を、冷淡に評したジョンソンは、一方で、革命政府の支持者でありながら王政復古後に二度も変節を遂げたドライデンに対しては比較的寛大な評価を下しているが、著者はこのことに、革命後の時代に対する

ジョンソンの現実的具体的感覚を看て取る。また、1695年の検閲法廃止に伴って激増した印刷出版物が言論の活発化を引き起こすために必要な、英語改良のさまざまな動きがあったことに言及し、ジョンソンの辞典編纂もその重要な要素であったとしている。そして、この動きの中心地であったロンドンから生まれたジャーナリズム、伝記作品にもジョンソンが寄与していることを述べ、個人と個人、個人と社会との関わりが重要な要素となっている近代小説の発生にも彼が間接的に影響していることを指摘している。さらには詩『ロンドン』が持つ、ロンドンから離れるというテーマや、ロンドンの出版社の意向を反映するアンソロジー文化が、正典とされる作家や作品を規定するという構造などにおいても、ジョンソンおよび当時のロンドンの存在が文学の動向を左右している点を強調している。

さらに第4章「19世紀前半—ディケンズの時代」では、冒頭でワーズワースとブレイクの詩が描く対照的なロンドンの姿を紹介し、当時急速に拡大しつつあった都市ロンドンが内包していた問題を提示する端緒としている。そして、人口の増加によってスラム化する市街地、リージェント・ストリートの創設がもたらした富裕地区と貧困地区の明確な区別、繁栄する大英帝国が実は極端な貧困者と富裕層の「二種類の国民」を抱えながら成り立っていたという矛盾等に言及し、この激動の時代のロンドンを徹底的に描いたディケンズについて、具体的な作品を取り上げながら詳述する。なかでも、小説内に頻繁に現れてくる監獄、犯罪、死刑囚などに見られるディケンズの強い関心が、「推理小説」という新ジャンルを生み出した点に言及し、巨大な迷宮と化しつつあった都市ロンドンとそこに内在する諸問題や矛盾点が、ディケンズおよびその他の作家が、優れた小説作品を多数創造する原動力となっていたことを指摘して終わっている。

同じく19世紀を扱った「19世紀後半—オスカー・ワイルドの時代」は、ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』を主たるテーマとしている章である。この小説が成立する背景となった事象の一つとして、まずはロンドン中心部にあるナショナル・ポートレート・ギャラリーの存在に言及している。このギャラリーの成立は、当時の博物館創設ラッシュの流れのなかに位置づけられ、国民の教育と啓蒙、英国社会の維持と発展という博物館全般が持つ性質を典型的に備えたものであると説明し、肖像画の持つ教育的効果—外面を視覚的に複製した肖像画は、描かれた人物の内面をも伝えることができるという考え方を提示する。また、次のセクションでは写真術の発展と肖像写真の普及、記録の手段および人相学や骨相学の研究手段としての有効性などが挙げられ、それが世界中の事物を記録して整理分類しようとする博物学的性向に合致していると同時に、人間の外見と内面の相関性という問題をさらに強調していると述べている。その上で『ドリア

ン・グレイの肖像』が、ワイルドの多くの作品と同様に自己像の確認のプロセスをテーマにしており、ドリアンの写真的身体に基づく博物学的な自己像の構築は、上述のような社会背景によってより効果的になっている、としている。ただ、ドリアンの試みが最後には破綻をきたしてしまうのに反し、博物館を巡る事態にはそのようなことは起こらず、第一次世界大戦で英国が自己像の修正を余儀なくされた時には王立戦争博物館を建設することによってその問題に対処したこと、及び、今日もロンドンや世界の各所でイギリス国家による博物館運営が行われているという事実を示し、小説と現実の差異も指摘することを忘れてはいない。

さて、政治的にやや不安定な要素を抱えながらも、大英帝国の領土拡張主義やレッセ・フェールの政策が維持されていた1920～30年代を扱っているのが、第6章「モダニズム—ヴァージニア・ウルフの時代」である。最初にT.S.エリオットの『荒地』にある「非現実の都市」という表現に着目し、帝都ロンドンのモダニティが、少なくとも3つ—機械、金融・情報、帝国というシステム—の側面から重層的に描かれていることを示す。続いてヴァージニア・ウルフの『灯台へ』を取り上げて、スカイ島での近代化や商業化が示す近代における田舎と都会の複雑な関係に言及し、島に対して用いられる「うつろな空間」という言葉と、ラムゼイ夫人の意識が向かう「無限」の世界に、大英帝国のシステムのジレンマとその解消を読み取っている。最後にジャマイカ出身の詩人ユナ・マースンの「イングランドの春」と「縮れ毛ブルース」を異種混濁的なモダニズム詩と位置づけ、西洋の皮相的プリミティズムやレイシズムを逆照射したものであると分析する。そして、これらのテキスト全てが、都会・田舎・帝国という一見異なる空間が、実は互いに交錯していることを描き出しているのだと結論している。

最後に第7章では、今世紀(2006年)に出版された歴史小説内でのロンドン表象に注目し、歴史的な事象と空間との関係性を論じている。「第二次世界大戦と現代—セーラ・ウォーターズの『ナイト・ウォッチ』を読む」と題されたこの章では、終戦から2年後の1947年、ドイツ軍による長距離ロケットの攻撃が激しさを増す1944年、ロンドン大空襲のさなかの1941年、それぞれの年代のロンドンに生きるさまざまな人間の生活について、小説中の各場面を詳細に分析している。そして、作者ウォーターズがこれまでも一貫して扱ってきた「空間と移動」「同性愛」「破壊と創造」「秘密と真実」というテーマが、彼女の徹底した調査と知識に基づく客観性が創出したロンドンの姿とどのように結びついて、この小説を傑作とならしめているかを提示している。締めくくりとして、ベンヤミンがボードレールに対して用いたフラヌール(「歩く傍観者」)の概念を導入し、『ナイト・ウォッチ』の登場人物の一人である女性同性愛者をフラヌール/フラヌーズと位置づけ、終戦後のロンドンという空間で、過去を肯定して新しい生き方を模索す

る人間の姿、というテーマが明示されている。

本年、2012年の歴史的な出来事の一つといえるオリンピック大会の開会式で、中世的な農村の風景が産業革命の時代を経て近代的都市へと変貌してゆく様子が、ロンドンという空間でダイナミックに再現されたことは記憶に新しいであろう。本書の各章において、執筆担当の著者独自の視点から提示されているロンドンの姿は、どの時代においてもロンドンが間違いなくその中心にあり、さまざまなかたちや次元でイギリス文学に関わりを持ち続けてきたことを、オリンピック開会式の映像以上に効果的に伝達することに成功している。複数の著者による著書であるため、ミセラニー的な多様性を備えていることが魅力であるが、ことによると今一步の統一性を要求する読者もいるかもしれない。特に、各章のタイトルが最後の第7章を除いて「○○—(作家名)の時代」という形で統一されているため、内容や構成においても一貫性を期待している読者は、タイトルにある作家がその章の大部分を占めているものから、半分以下のスペースでしか扱われず、むしろ他の作家たちに重点があるものまでかなりのばらつきがあり、さらには、これだけがタイトルの形が特異である最終章は、全くの作品論と言ってもよい性質のものであるという点に戸惑いを覚える可能性もある。一方で、ロンドン万国博覧会の話が2つの章で重複して出てきたり、同じ詩の同一箇所が別々の章で引用されてあったりする点についても、コンテキストが異なるので問題ないという考え方と、限られたページ数の同一書物内では、重複にある程度配慮して、その分異なった側面を提示する方がより多様なロンドンを提示出来るという見解の両方があり得るであろう。いずれにせよ、本書自体もまた、ロンドンという都市の存在が生み出した功績の一つであると言えるし、今後も変化を続けるロンドンが人々の関心の的であり続けることをあらためて確信させてくれる一冊であることは疑いようがない。